

プッサン作 《ピュラモスとティスベのいる嵐の風景》 — 先行研究と問題の所在 —

The current state of research on Poussin's *Stormy Landscape with Pyramus and Thisbe*

栗田 秀法

KURITA Hidenori

要 旨

筆者は現在シンクレティズム的視座からニコラ・プッサンの晩年の作品の再検討を行う研究に取り組んでいるところであり、《ピュラモスとティスベのいる嵐の風景》(1651年、フランクフルト、シュテューデル美術館蔵)はその中心をなす研究対象である。本稿では本格的な解釈に先立つ予備的考察の一環として、第一に典拠となったオウィディウス『変身物語』巻4に関する17世紀の仏訳テキスト、それに付随する寓意的解釈のテキストを洗い出す作業を行った。並行して同主題の先行作例の収集の作業と図像学的な考察を行ったところ、ピュラモスとティスベの図像はおおよそ次の六つの類型に分類が可能であることが判明した：(1) 密かに通じ合うピュラモスとティスベ、(2) ティスベの逃走、(3) ピュラモスの自害、(4) ティスベの死せるピュラモスの発見、(5) ティスベの自害、(6) ピュラモスとティスベの遺骸を嘆く人々。5番目の「ティスベの自害」が最も作例が多いにもかかわらず、プッサンは4番目の「ティスベの死せるピュラモスの発見」を選択しており、その意図や意義を探る必要が存する。また、プッサンの作品の特徴としてピュラモスが大量の血を流していることが観察できるが、先行作例の比較からは極めて珍しい特徴であることもわかった。本稿で行った図像学的な分析から場面選択とピュラモスの多量の流血表現にプッサン作品の独自性がうかがわれることが浮かび上がったことは今後の研究にとって大きな収穫で、それらを糸口にしつつ、次号でここ数十年積み重ねられた先行研究の咀嚼と批判の作業を行った上で、異教とキリスト教の混淆というシンクレティズム的な伝統を掘り下げて寓意的解釈の可能性を探っていく。

はじめに

ニコラ・プッサン(1594-1665)は、1651年にカッシアーノ・ダル・ポッツォのために《ピュラモスとティスベのいる嵐の風景》(図1)を描いた⁽¹⁾。現在筆者は、科学研究費の助成を受けて「ニコラ・プッサンの絵画世界とシンクレティズムの関連についての研究」(基盤研究(C)、課題番号23K00156)をテーマに研究を遂行中で、その中心をなすもののひとつが本作品である。本稿では、

研究推進のための予備的な考察の一つとして、初期資料の紹介に加え、これまで必ずしも十分に行われてこなかった図像学的考察を行う。

1 作品の概要

この作品の寸法は横幅が274センチと、個人向けのタブローでは最も大きな作品である。この作品の構想については、プッサンの初期の伝記作家フェリビアンが、画家からジャック・ステラに送られた書簡の一部を紹介している。

私は、地上の嵐を再現しようと試みた。最善を尽くして、猛烈な風や、闇・雨・稲妻、そして数か所にわたって落ち、混乱を巻き起こさずにはいない雷といったもので満ちた大気の効果をも模倣したのだ。そこに見られるすべての人々は、そうした天候によって役柄を演じている。ある者は砂塵のなかを逃げ、自分たちを巻き込む風の流りに従う。別の者は逆に風に逆らって進み、眼に手を当てて苦勞して歩く。一方では、羊飼いが一頭の獅子を見て、羊の群れを放り出して走っている。獅子はといえば、何人かの牛飼いを倒したあとで他の羊飼いを襲っており、そのうちのある者は防戦し、別の者は牛を突いて逃げようとしている。こうした混乱のなかで、砂塵が大きな渦を作って巻き上がる。少し離れたところで、一匹の犬が吠え、毛を逆立てているが、あえて近づくことができないでいる。絵の前景では、ピュラモスが死んで地面に横たわっており、彼の近くではティスベが苦悩に身を任せているのが見られる（矢橋透訳）⁽²⁾。

ここでプッサン自らが嵐の描写を主眼としたという主張には、ピアウォストツキが指摘したように⁽³⁾、プッサンが挿絵を付け、シャンブレーが仏訳して1651年に刊行されたレオナルド・ダ・ヴィンチ『絵画論』の66章「いかに嵐を表すか（comment il faut représenter une tempeste; Come si deve figurar una fortuna）」を意識した可能性がある。この仏訳は、やはり1651年に刊行されたレオナルドの『絵画論』に基づくもので、カッシアーノ・ダル・ポッツォの所有になる「ウルビーノ稿本（Codex Urbinas latinus 1270）」のコピーを原本とするものであったことは興味深い。

またプッサンの最初の伝記作家ベッローリは、「カッシアーノ・ダル・ポッツォのために制作されたティスベの風景画」について次のような作品記述を残している。

ピュラモスとティスベ

ティスベが両手を広げて最愛のピュラモスの亡骸の上に駆け寄り、大地と天、そして万物が恐怖の渦に巻き込まれる中、死へと飛び込む。つむじ風が巻き起こり、木々が風に揺れ、曲

がる。雲の中で雷鳴が響き、稲妻が幹の一番太い枝に落ちる。その暗雲の中の恐ろしい稲妻が城を照らし、丘の上の数軒の家が燃える。そう遠くないところで、風が勢いよく雨を降らせる。羊飼いと牛の群れは逃げ惑い、馬に乗った者は嵐を避けるため、牛をできるだけ城のほうへ追い立てる。恐ろしいことに森から一頭のライオンが現れ、騎手とともに地面に倒れた馬を引き裂き、仲間が斧でこの獣を打ちのめす。不幸な恋人たちに死をもたらしたのはこのライオンである⁽⁴⁾。

ブッサンの最初のカatalog・レゾネを1837年にまとめたスミスは、次のような記述を残している。

ピュラモスとティスベ：このバビロニアの恋人たちの物語は、壮大で美しい風景の前景に導入されている。そこでは、生気を失ったピュラモスはその体を横たえており、致命的な剣が彼の横にある。この感動的な光景は、驚愕したままのティスベの目に今日の当たりになされたようで、彼女は手を絶望に広げ、恐怖の悲鳴が彼女の唇から漏れ出そうとしている。やや遠くには、薄明かりの中で、恐れおののく馬に飛びかかるライオンが見える。その馬の騎手は横に倒れており、彼の仲間は黒い馬に乗って野獣に槍で猛攻撃している。この危険な場面からは、家畜を連れた旅行者たちがあらゆる方向に逃げる様子が見て取れる。この場面には、周囲の丘陵の斜面に沿って配置された木々の群れや美しい建物で飾り立てられた、起伏に富んだ開けた地域が示されている。これらの対象物は、主要な対象物には日の光がかすかに当たっているものの、普段よりも弱い光でしか認識されない。昼の光線は既に丘の向こうに沈んでおり、その去り行く光は最も目立つ対象物にのみ弱い光を放っている。このテーマはまた、最も自然で適切なエピソードによって美しく説明されている。稲妻の鮮烈な閃光と猛烈な突風に伴う嵐が恐ろしいほどに荒れ狂い、野生動物が暗闇の旅行者を襲撃している。驚愕した農民たちはあらゆる方向に逃げ出している。この素晴らしい芸術作品において画家は、自然と偶発的な出来事が提供できるすべてを捉え、具現化している。それは彼の絵に壮大さと崇高さを与える可能性があるものである。チャトレイン、ヴィヴァレスらによって版画化されている⁽⁵⁾。

なお、中景左手に描かれた円形の建物がパラディオ『建築四書』（1570）のバッコス神殿（Tempio di Bacco: 現聖コスタンツァ聖堂）の引用であることをブランドが1967年に指摘している⁽⁶⁾。またブランドは、中景の湖の水面が穏やかであること⁽⁷⁾、自然の圧倒的な力とそれを前にした人間の無能さが主眼となっていること⁽⁸⁾、という重要な指摘をなし、その後の研究でも注目されることとなる。また、ブッサンの書簡が示すように、ブッサンは当時自然それ自体への関心が大きいため、ピュラモスとティスベのモチーフは最終段階で導入されたとしたが⁽⁹⁾、これについては議論の余地があろう。

上に紹介した作品記述において言及されていないものの注目したいのは、中景の樹木に落ちた雷光の延長上にティスベの姿が配置されていることである。

2 典拠と寓意的解釈

プッサンの作品の典拠はオウィディウス『変身物語』巻4である。17世紀の仏訳には物語ごとに梗概がつけられているので、紹介しておこう。

第4話 ピュラモスとティスベ

ピュラモスとティスベは隣人で、同じ年齢だった。彼らはお互いに恋に落ち、自分たちの秘密の情熱を長い間維持した。しかし、近くに住んでいるにもかかわらず、お互いを見る手段は、彼らの住居の壁に作った穴を通してのみだった。最終的には、熱い願望を実現するため、バビロンの町の外にある場所を定めた。ティスベが最初にその場所に現れ、その場所の桑の木の下に座った。これが二人の待ち合わせの場所だった。彼女がまだそこにいたとき、森から出てきたライオンが彼女をひどく怖がらせ、彼女は恐れから逃げ出し、木の下に自分のベールを残した。ライオンはベールを引き裂き、血で汚してから、口の渇きを癒すため、近くの泉で水を飲みました。すぐにピュラモスもその場所に到着し、彼の恋人の血だらけのベールを見つけた。これを見て、何か凶暴な動物が彼女を襲ったと信じた彼は、後悔の念にかられ、その場で自決した。その後、ティスベは少し落ち着いてその場所に戻り、彼女の愛する者が亡くなっているのを見て、同じナイフで自分の胸を刺した。こうして、二人は悲劇的な不運によって、その木を自分たちの血で濡らしたのである。それ以来、その木は白い実を生む代わりに、赤い実を常に結ぶようになったと言われている⁽¹⁰⁾。

さらにのちの詳しい検討のため長くなるが『変身物語』の該当箇所を全文引用しておこう。

二人はいつもの場所に集まってきたの。そうして、小さな囁き声で、
 不満を一頻り嘆き合った後、こう取り決めたのよ、静寂に包まれる夜が来たら、
 家を出て、都の家並も後にし、
 郊外の広い野原に着いたら、逸れないよう
 ニノスの墓の前で落ち合うことにして、木陰に
 隠れていることにしよう、と。そこには、真っ白なたわわに実る
 一本の高い桑の木が、冷たい泉のほとりに立っていたの。
 『そうしよう』、二人とも賛成したわ。遅々として進まないように思われた陽も

漸く波間に沈み、代わって、夕日が同じ西の海から顔を覗かせました。
ティスベは、闇に紛れ、枢を回して戸を開け、巧みに
家人の眼を晦まして、家の外に出ると、顔をヴェールで覆った姿で
墓のある所にやって来て、言われた木の下に腰を下ろしたの。
愛が大胆にさせていたのね。さあ、すると、そこに、仕留めた牛の
真新しい血で口を血濡れにした雌獅子が
期の傍らの泉の水で、渴いた喉を癒そうとやって来たのよ。
バビュロン人のティスベは、遠くから月明かりでその雌獅子を
目にすると、怯えた足取りで暗い洞窟の中に逃げ込んだわ。
でも、逃げる途中、背から滑り落ちたヴェールをそのまま後に残していったの。
たっぷり水を飲んで渴きを癒した獐猛な雌獅子は、
森に戻っていかうとした時、偶々、持ち主のいないヴェールを見つけ、
その薄衣を血塗れの口でずたずたに引き裂いてしまったのよ。
遅れて家を出たピュラモスは、厚い砂埃の上に付いた紛れもない
猛獣の足跡を発見すると、その顔は一面真っ青になったわ。
でも、血塗れになった薄衣も見つけると、こう言ったの、
『一夜が愛する二人の命を奪うことになるのだ。二人の内、
彼女のほうは誰よりも長く生き永らえるに値する女なのに。
僕が悪かった。可哀そうな女、お前の命を奪ったのは、この僕なのだ。
恐ろしさで一杯の場所に、しかも夜中に行くように言ったのは僕なのだから。
その僕が遅れてやって来るなんて。僕の身体を引き裂き、
罪深いこの腸を凶暴に噛み砕き、食らい尽くすがいい、
おお、お前たち、この崖下に棲む限りの獅子という獅子たちよ。
だが、死を唯願うだけなら臆病者でもできる』。そう言うと、ティスベの
ヴェールを拾い上げ、それを手にして、約束した桑の木の下に行き、
馴染みの薄衣に涙を注ぎ、口づけをした後、こう言ったの、
『さあ、受け取れ、進るわが血潮にも染まるのだ』と。そう言うと、
腰に佩いていた剣を自分の腹めがけて突き立て、命尽きようとしながら、
すぐさまその剣を熱い血潮の滾る傷口から引き抜いたの。
地面に仰向けに倒れ込むと、血飛沫がどっと高く吹き上がったわ。
丁度、鉛の水道管が破れて裂け目ができ、
細い孔からしゅうしゅう音を立てながら高々と
水が噴き出して大気を劈く、まさにそのように。

致命の傷から吹き上がる血飛沫を浴びて、桑の実はどす黒い色に
色を変え、血に濡れた根も

気に実る桑の実を赤紫色に染めたのよ。

さらに、そこに、恐怖まだ冷めやらぬ様子で、恋人を落胆させてはいけないと、
彼女が戻ってきて、四方八方を見回し、必死に若者を探し求めたわ。自分が、
どれほど大きな危険を逃れてきたか、是非とも聞いて貰いたいと思いながらね。

目にするその場所や木の佇まいは見覚えがあったけれど、

木の実の色に戸惑ったの。怪訝に思ったのよ。この木だったかしら、と。

そうして怪しんでいると、血溜まりになった地面で蠢く、何やら人の
手足のようなものが目に飛び込んできたわ。ティスベは思わず後ずさりし、
顔を黄楊の木よりも蒼白にして、ぶるぶると震える様子は、まるで水面に
颯と吹きつける風で波立ち、打ち震える海原のよう。

でも、暫くしてそれが愛する人だと分かると、

辺りに響く音を立てながら、罪もない自分の腕を激しく打って、

髪の毛を引き篋り、愛する人の身体を掻き抱いて、

涙で傷口を満たすと、涙と血が混じり合うのです。

そうして、冷たい恋人の顔に口づけしながら、『ピュラモス』と

その名を呼び、こう叫ぶのでした、『どんな禍が私からあなたを奪ったの。

ピュラモス、返事をして。誰よりもあなたの愛するティスベがあなたを

呼んでいるのよ。聞こえてる？ 項垂れたその頭を、どうか挙げて頂戴』と。

ティスベの名を聞いて、ピュラモスは、迫り来る死で重くなった目を

開いたけれど、彼女の姿を一目見ると、再び目を閉じたの。

ティスベは自分のヴェールと中身の剣のない象牙の鞘とを

見つけると、こう言ったわ、『可哀そうなあなた、あなたは、私を愛する余り、

自らの手で命を絶ってしまったのね。私にもそれと同じことをする雄々しい

手もあるし、愛もあるわ。その愛もあるわ。その愛が自らを殺める力を与えてくれます。

亡きあなたの後を追いましょう。誰よりも哀れな私、私はあなたの死の因とも

道連れともいわれましよう。ああ、死だけが私から引き離れたあなたでは

ありましたが、最早その死さえ、あなたを私から引き離せないのです。

でも、ああ、とても可哀そうな方たち、私の両親とあの人の御両親、

どうか私たち二人の言葉を聞き届けて、願いを叶えて下さり、

固い愛が結び付け、最期の時が一つにした私たち二人を

同じ墓に葬ってくださいましよう。

また、今は一人の可哀そうな亡骸をその枝で覆い、
やがては二人の亡骸を覆うことになるお前、桑の木よ、
私たち二人の死の印を留めて、これからは、いつも嘆きに相応しい
黒い実を付けておくれ。私たち二人が流した血の形見として』。
ティスベはそう言うと、恋人の血潮でまだ生暖かい剣の切っ先を
胸に押し当て、胸深く刺さるように剣に突っ伏したの。
でも、彼女の願いは神々の心を打ち、親たちの心を打ったわ。
というのも、桑の木の実は、熟したとき、黒い色の実を付け、火葬の後に残った
二人の灰と骨は、一つの骨壺に納められて、安らかに眠っているのですもの」(大西英文訳)⁽¹¹⁾。

ブッサンの作品では嵐の情景が描かれているが、典拠では夜であることしか示されず、画家がレオナルド・ダ・ヴィンチの絵画論を意識したこと以上の何らかの意図があった可能性もある。

なお、17世紀前半の『変身物語』仏訳には、キリスト教的な含意はないものの、中世の『教訓版オウィディウス』⁽¹²⁾ よろしく、しばしば物語の道徳的な説明を含む論説が付されていたことである。ピュラモスとティスベの物語に該当する箇所では次のとおりの解説がなされている。

ピュラモスのティスベの情愛はその不変さと熱情と同じくらいの不幸を伴っていた。哀れな恋人たちよ、その激しさによってそんな悲惨な破滅に至るほどそんなに燃え上がる炎に焼かれ、また、来たる時代においてもあなたたちが愛の珍しい例となり、同時に不運と悲惨の悲しい事例となる必要はあったのだろうか？あなたたちのあまりにも哀れな結末を悼みつつも、あなたたちの勇気に賛辞を送らずにはいられないが、同時に、あなたたちの情熱に伴う無分別さをも非難せざるを得ない。自分たちが満たされるためには、一緒になることで自分たちを幸せにできる人たちの同意を得るために、もっと努力する必要があったのではないか？あなたの両親は、それほど非人道的で、全く容赦がなかったのか？彼らを言い伏すか、あるいは徐々にあなたたちの情熱を抑える必要があった。彼らは認めたがっていないから。彼らの支配下にあるあなた方の魂は、相互に虜にされ、あなた方の命を預かる人々の尊敬と権威に反する愚かな愛の奴隷にされてはならない。この父祖に対する敬意の欠如が、あなた方の炎を盲目にさせ、その盲目があなた方を破滅へと導いたのだ。しかし、不幸な恋人たちよ、あなたたち自身だけが責任を負うのは酷だ。なぜなら、あなたたちが礼を欠いた親たちも、あなたたちの立場に逆らったからだ。二人は自分たちの愛情に抵抗する必要はなく、それは親の同意がなかったことを除けば何の不備もなかった。親が自分たちの意志をあなたたちの情愛に合わせれば、あなたたちの人生を終わらせるこの悲劇的な行為の代わりに、あなたたちの願いが実現され、その厳格な厳しさがあなたたちにもたらした不幸に劣らない

幸せをもたらしたであろう。確かに、賢明なアリスト、私はどちらを非難すべきか分からない。親たちか、子供たちか、お互いが有罪であるように思える。もし子供たちが生んでくれた人々に対して守らなければならない不可侵の敬意がなかったとしても、愛の力が私に恋人たちを許容できると判断されるように思われる。この物語から彼らの仲間が共に何らかの教訓を得ることを許そう。その厳しさを和らげ、柔軟になる人もいるだろうし、より敬意を持ち、これほど激しい危険な情熱を抑えることに対してより注意深くなる人もいることだろう⁽¹³⁾。

ここでは、恋人たちとそれぞれの両親の不注意や頑なさが批判されており、ストア主義的な情念の抑制、中庸の重要性が指摘されている。

3 図像学的な考察

(1) 図像類型

「ピュラモスとティスベ」の主題については、ウォーバーク研究所の図像データベースを検索すると⁽¹⁴⁾、12世紀から20世紀初頭までの172の作例が収録されていることがわかる。

中世末期の14-5世紀の作例では『教訓版オウィディウス』、ボッカチオ『名婦伝』、ピサン『オテア書簡』が主な典拠である。その後15世紀からは『変身物語』の挿絵が増加し、単独の版画や絵画の作例が登場する。

描かれた場面を類型分けすると次の六つほどに分けられる。

- ①密かに通じ合うピュラモスとティスベ
- ②ティスベの逃走
- ③ピュラモスの自害
- ④ティスベの死せるピュラモスの発見
- ⑤ティスベの自害
- ⑥ピュラモスとティスベの遺骸を嘆く人々

このうち作例が多いのが④と⑤で、プッサンの作例は④に当たる。

類型④で、多かれ少なかれプッサンと比較可能なのは、マルカントニオ・ライモンディの銅版画(図2)とドイツの木版画(図3)である。地面に横たわるピュラモスの遺骸を前にしてティスベが両手を広げて走り寄っている。ガッセルの絵画(図4)もこの類型に分類できる。

オヴィディウスの17世紀の挿絵では、テンペスタ(図5)やド・パッセ(図6)の作例のように、

類型⑤が採用されている場合が大半である。1606年に刊行された『変身物語』の5巻の扉絵（図7）でも類型⑤のティスベの自害が大きく描かれている。プッサンが類型⑤ではなく類型④を採用した意図や意義については改めて考察が必要である。いずれの作例でも、冷たい泉のほとりに立つ一本の高い桑の木の存在が比較的明瞭だが、プッサンの作例では画面の前景左下で視界を遮る大きな岩塊に生える大木がおそらく桑の木で、岩塊の右手からは小川のせせらぎを見出すことができる。

(2) ピュラモスが流した血

プッサンの作品を特徴づけるモチーフでもあるにもかかわらず、古文書の記述資料で触れられていないモチーフとして注目しておきたいのが、ピュラモスが流した血である。プッサンの作例ではおびただしい量の血が流れており、その流れはティスベの後ろまで続いている。この描写の根拠の一つは典拠の次の一節に求めることができるかもしれない。

腰に佩いていた剣を自分の腹めがけて突き立て、命尽きようとしながら、
すぐさまその剣を熱い血潮の滾る傷口から引き抜いたの。
地面に仰向けに倒れ込むと、血飛沫がどっと高く吹き上がったわ。
丁度、鉛の水道管が破れて裂け目ができ、
細い孔からしゅうしゅう音を立てながら高々と
水が噴き出して大気を劈く、まさにそのように
致命の傷から吹き上がる血飛沫を浴びて、桑の実はどす黒い色に
色を変え、血に濡れた根も
木に実る桑の実を赤紫色に染めたのよ。

プッサンの典拠への忠実さを物語る事例ということもできそうであるが、この主題の先行作例を見ると流血の描写はきわめて珍しいものであることがわかる。確かにピュラモスやティスベの出血が表される例は中世の写本や15世紀の多色木版画に例がないわけではなく、実際、ヴェヒトリンのキアロスクーロ木版画（図8）でも、カラー図版で確認していただきたいのだが、画面下端にうっすらと赤の顔料が摺られていることがわかる。とはいえ、プッサンの作例の流血量とは比べ物にならない。プッサンが前景の画面中央に大量の血を泉のごとく描いたことの意味はさらに問い直される必要があるように思われる。

おわりに

この作品についての議論は、ヴァーディが「運命のいたずら」と1648年から1651年にかけて描か

れた嵐を描いた風景画を結び付けた論考を1982年に発表して以降、とりわけ作品の所蔵されているドイツを中心に大いに活発になっており、主なものは文献表に列挙した。多くのものは新ストア主義的な視座からのものであるが、最近ではサントのようにキリスト教的な文脈を探ろうとする研究も現れている。次なる論考では1982年以降の本作品の研究の再検討をつぶさに試み、その上でシンクレティズム的な視座からの考察を掘り下げてみたい。

註

- (1) Rosenberg (1994), no.203 ;Zätzsch (1999); Milovanovic (2015), no,92.
- (2) マラン『崇高なるブッサン』42 - 43頁 : Félibien (1685), p.160 : j'ai essayé de représenter une tempête sur terre, imitant le mieux que j'ai pu, l'effet d'un vent impétueux, d'un air rempli d'obscurité, de pluie, d'éclairs & de foudres qui tombent en plusieurs endroits, non sans y faire du désordre. Toutes les figures qu'on y voit jouent leur personnage selon le temps qu'il fait; les uns fuient au travers de la poussière, & suivent le vent qui les emporte; d'autres au contraire vont contre le vent, & marchent avec peine, mettant leurs mains devant leurs yeux. D'un côté un Berger court, & abandonne son troupeau, voyant un Lion, qui, après avoir mis par terre certains Bouviers en attaque d'autres, dont les uns se défendent, & les autres piquent leurs bœufs, & tâchent de se sauver. Dans ce désordre, la poussière s'élève par gros tourbillons. Un chien, assez éloigné, aboie, & se hérissé le poil, sans oser approcher. Sur le devant du Tableau l'on voit, Pirame mort & étendu par terre, & auprès de lui, Thisbé qui s'abandonne à la douleur.
- (3) Bialostocki (1954).
- (4) Bellori (1672), p.455: Riportiamo in ultimo il paese di Tisbe per il Signor Commendatore Cassiano del Pozzo. PIRAMO, E TISBE Corre Tisbe con le braccia aperte sopra il cadavero dell' amato Piramo, e forsennata precipita a morte, mentre la terra e 'l Cielo, e tutte le cose spirano funesto horrore. Volgesi un turbine, e restano gli alberi scossi e piegati al vento. Si ode fra le nubi il fragore del tuono, e' fulmine percuote il maggior ramo d'un tronco. L'horribil lampo fra quell'oscuro nembo illumina un castello ed avvampano alcune case sopra un colle. Non lungi il vento porta impetuosa pioggia, e pastori & armenti si riparano in fuga, mentre uno a cavallo stimola quanto può i bovi verso il castello per ripararsi dalla tempesta. Spaventevole è un leone, che uscito dalla selva sbrana un cavallo caduto col cavaliere a terra, e' compagno percuote intanto la fiera con l'hasta; questo è il leone, che ha cagionato la morte a gl'infelici amanti.
- (5) Smith (1837) no.304:Pyramus and Thisbe. The story of the Babylonian lovers is introduced in the foreground of a grand and beautiful landscape, where the lifeless Pyramus lies extended, with the fatal sword by his side: this affecting sight appears to have just met the eyes of Thisbe, who stands aghast, with her arms extended in despair, and a shriek of horror seems to escape from her lips. At some distance, through the gloom of the twilight, may be descried a lion springing on a terrified horse, whose rider lies prostrate by its side, while his companion, mounted on a black charger, is furiously attacking with a spear the savage beast: from this scene of danger travellers with their cattle are seen escaping in all directions. The scene exhibits an open country of a broken and undulating surface, watered by a spacious lake in the centre, adorned with clusters of trees, and a

variety of beautiful buildings distributed along the acclivities of the surrounding hills. These objects are but faintly perceived through the prevailing gloom, for the luminary of day has long since sunk below the hills, and his departing rays cast but a feeble light on the most prominent objects. The subject is also beautifully illustrated by the most natural and appropriate episodes. A storm, attended by vivid bursts of lightning and furious gusts of wind, rages with awful violence; wild beasts are attacking benighted travellers; and affrighted peasantry are flying in every direction. In this glorious work of art, the painter appears to have seized and embodied all that nature and accident could offer, that might tend to give grandeur and sublimity to his picture. Engraved by Chatelin, Vivares, and anonymous.

- (6) Blunt (1967), pp.235-236.
- (7) Blunt (1967),p.295.
- (8) Blunt (1967),p.297.
- (9) Blunt (1967),p.299.
- (10) *Les métamorphoses d'Ovide* (1621),p.142 : LE SVIET DE LA IIII. FABLE. Pirame & Thysbée estans voisins & de mesme aage devindrent amoureux l'un del'autre, & entretindrent long-temps leurs secrettes flames sans avoir moyen de se voir qu'à travers un trou qu'ils firent à la muraille de leurs logis qui estoient proches, mais enfin pour accomplir leurs chauds desirs, ils s'aßnerent un lieu hors la ville de Babylone, où Thysbée se trouva la premiere & s'aßit dessous le meurier, qui estoit le rendez-vous à tous deux. Elle ne fut pas là qu'une Lionne sortant du bois luy donna tellement l'espouvante, qu'elle s'enfuit de peur & laissa son escharpe au pied de l'arbre, que la Lionne deschira et ensanglanta toute, puis alterée s'en alla boire à une fontaine qui n'estoit pas loing de la. Pirame y arriva aústot & trouva l'escharpe de sa maistresse sanglante, qui luy fit croire que quelque beste furieuse l'avoit devoree, & de regret se tua sur la place: puis Thysbee un peu rassurée y revint voyant son serviteur mort s'ouvrit le sein du mesme poignard. Ainsi tous deux par un tragique mal-heur arrouserent de leur sang le meurier, qui à ceste occasion a tousiours produit depuis des fruits rouges au lieu des blancs qu'il portost auparavant.
- (11) 『変身物語』 186-191 頁 (巻 4、83-166 行)。
- (12) Bersuire (2023)
- (13) *Les métamorphoses d'Ovide, XV discours contenant l'explication morale des fables* (1621), p.74-75: C'est Pyrame & Thisbée, dont les amoureuses passions furent accompagnées d'autant de malheur, qu'elles eurent de constance & d'ardeur. Miserables amans, falloit-il que Vous fussiez consumez de si bruslantes flames pour estre par leur violence precipitez à une si deplorable ruine, qui vous a rendus aux fiecles venus en suite du vostre, rares exemples d'amour, & ensemble tristes pourtraicts de l'infortune & de la misere ? Je ne puis en plaignant vostre trop pitoyable fin, que je ne loue la fermeté de vos courages, mais je ne puis que je ne blasme aussi l'indiscretion dont vostre feu fut accompagné. Ne deviez-vous pas, pour vostre contentement, davantage peiner à obtenir le consentement de ceux qui pouvoient vous rendre heureux en vous joignant enfemble? Vos parens couvoient-ils tant d'inhumanité, qu'ils fussent du tout inexorables? Ou il les falloit vaincre, ou peu à peu dompter l'ardeur de vos affections, qu'ils ne vouloient point autoriser. Vos ames, qui estoient en leur pouvoir, ne devoient point se reciproquement captiver, & rendre esclaves d'un fol amour, qui s'opposoit au respect, & à l'autorité de ceux

ausquels vous deviez la vie. Ce peu de respect que vous rendistes à vos peres permit à vostre feu de vous aveugler, & vostre aveuglement vous perdit. Toutefois infortunez Amans, c'est trop, de vous charger seuls de toute la faute de vostre desastre: car vos parens ausquels vous manquastes, manquerent aussi en vostre endroit. Ils ne devoient point resister à vos flames, qui n'avoient rien d'illegitime, que le defaut de leur consentement. S'ils euffent accommodé leurs volonteé à l'unité de vos affections, au lieu de cest acte tragique qui borna vos jours, vous eussiez veu le doux comble de vos souhaits accomplis, vous produire autant de bonheur, que leur austere severité attira sur vous de malheur. Il est vray, docte Ariste, je ne sçay lesquels accuser, ou les peres, ou les enfans, les uns & les autres me semblent coupables, & si n'estoit l'inviolable reverence que les enfans doivent à ceux desquels ils tiennent la naissance, les forces de l'amour me seroient juger les Amans excusables. Laissons leurs semblables recueillir en commun tel fruit, que bon leur semblera de ceste fable, les uns adoucissans leur rigueur, & se rendans plus ployables, les autres plus respectueux, & plus soigneux de temperer l'excés de si violentes & perilleuses flames.

(14) <https://iconographic.warburg.sas.ac.uk/home>

文献一覧：

オウイディウス『変身物語 上』（大西英文訳）講談社学術文庫、2023年

Bersuire, Pierre, *The Moralized Ovid*; edited and translated by Frank T. Coulson and Justin Haynes (Dumbarton Oaks medieval library, 82), Cambridge et al., 2023.

Les métamorphoses d'Ovide, traduites en prose françoise [par N. Renouard] et de nouveau... reveues... Avec XV discours contenant l'explication morale des fables. Ensemble quelques épistres traduites d'Ovide et divers autres traictez..., Paris, 1621.

Trattato della pittura di Leonardo da Vinci, Paris, 1651.

Traité de la peinture, de Léonard de Vinci: donné au public et traduit d'italien en françois par R. F. S. D. C., Paris, 1651.

Bellori, Giovanni Pietro, *Le vite de' pittori, scultori et architetti moderni*, Rome, 1672.

Félibien, André, *Entretiens sur les vies et sur les ouvrages des plus excellents peintres anciens et modernes*, vol.4, Paris, 1685.

Smith, John, *A Catalogue Raisonné of the Works of the Most Eminent Dutch, Flemish and French Painters: Nicholas Poussin, Claude Lorraine, and Jean Baptist Greuze*, London, 1837.

Bialostocki, Jan, "Une idée de Léonard réalisée par Poussin", *La Revue des arts*, 4.1954, 131-136.

Blunt, Anthony, *Nicolas Poussin* (Andrew W. Mellon Lectures in the Fine Arts; 1958), New York, 1967.

Schmitt-von Mühlenfels, Franz, *Pyramus und Thisbe. Rezeptionstypen eines Ovidischen Stoffes in Literatur, Kunst und Musik*, Heidelberg, 1972.

Verdi, Richard, "Poussin and the 'Tricks of Fortune'", *The Burlington magazine*, 124.1982, 681-685.

Bätschmann, Oskar, *Nicolas Poussin: Landschaft mit Pyramus und Thisbe; das Liebesunglück und die Grenzen der Malerei*, Frankfurt am Main, 1987.

- Maek-Gérard, Michael(ed.), *Nicolas Poussin, Claude Lorrain: zu den Bildern im Städel* ; [ex.cat.:Städtischen Galerie im Städelischen Kunstinstitut Frankfurt am Main, 11. Februar - 10. April 1988].Frankfurt am Main,1988.
- Brandt, Reinhard, “Pictor philosophus : Nicolas Poussin, ‘Gewitterlandschaft mit Pyramus und Thisbe’”, *Städels-Jahrbuch*, N.F. 12.1989 (1990), 243-258
- Rosenberg, Pierre, *Nicolas Poussin: 1594 - 1665* ; Galeries Nationales du Grand Palais, 27 septembre 1994 - 2 janvier 1995, Paris, 1994.
- Marin, Louis, *Sublime Poussin*, Paris, 1995 (邦訳 :『崇高なるブッサン』(矢橋透訳) みすず書房、2000年)
- McTighe, Sheila, *Nicolas Poussin's landscape allegories*, Cambridge et al., 1996.
- Zätzsch, Inge, “Nicolas Poussin, 1593 Les Andelys - 1665 Rom: Gewitterlandschaft mit Pyramus und Thisbe (1651)”, *13 Meisterwerke des Städel in Frankfurt am Main*, 1999, 90-102.
- Nau, Clelia, *Le temps du sublime: Longin et le paysage poussinien*, Rennes, 2005.
- Stumpfhaus, Bernhard, *Modus - Affekt - Allegorie bei Nicolas Poussin : Emotionen in der Malerei des 17. Jahrhunderts*, Berlin, 2007.
- Grave, Johannes, “Grenzüberschreitungen und trügerische Evidenzen: Nicolas Poussins “Gewitterlandschaft mit Pyramus und Thisbe””, *Marburger Jahrbuch für Kunstwissenschaft*, 42. Band (2015), 2016, 183-197.
- Milovanovic, Nicolas(ed.), *Poussin et Dieu*, Paris, 2015.
- Szanto, Mickaël, “Poussin, Roma, Amor: méditations sur une tempête à Babylone”, *Revue de l'art*, 198, 4 (2017), 7-15.

図版



図1 ニコラ・プッサン《ピュラモスとティスベのいる嵐の風景》1651年、油彩・画布、194 × 274cm、フランクフルト、シュテーデル美術館 (inv.1849)



図2 マルカントニオ・ライモンディ《ピュラモスとティスベ》1505-10年頃、銅版画、大英博物館



図3 ヤコブ・カレンベルク《ピュラモスとティスベ》1539年、木版画（ボッカチオ『名婦伝』挿絵）



図4 ルーカス・ガッセル《ピュラモスとティスベ》1540-50年、油彩・板、ヘルモンド博物館



図5 アントニオ・テンペスタ《ピュラモスとティスベ》1606年、銅版画、大英博物館



図6 クリスペイン・ド・パッセ《ピュラモスとティスベ》
1602-7年、銅版画、アムステルダム国立美術館



図7 オウイディウス『変身物語』（パリ、1621年）
第4巻扉



図8 ハンス・ヴェヒトリン（マルカントニオ・ライモンディに基づく）《ピュラモスとティスベ》1510年頃、キアロスクーロ木版、大英博物館

The current state of research on Poussin's *Stormy Landscape with Pyramus and Thisbe*

Hidenori Kurita

Regarding Poussin's *Stormy Landscape with Pyramus and Thisbe* (1651), a comparison of descriptions of the work in early sources and iconographic precedents has identified the representation of blood flowing from Pyramus in large quantities as being quite unique to Poussin.